

興味と理解が相互に深まるプロセスの検討 —教育実践への具体的提案に向けて—

田中瑛津子 (名古屋大学 教育学研究科 特任助教)

本研究の目的

児童生徒の学習内容に対する興味を育むことは教育の重要課題であると言える。興味研究において、近年「興味の深化(interest development)」という新たな視点が提起され(e.g. Hidi & Renninger, 2006), 「興味」という概念を単に「高い—低い」というだけではなく、「浅い—深い」という観点から捉えるアプローチの必要性が指摘されてきた。田中(2015)は、理科に対する興味を深さによって分類するための尺度を開発し、日本において深い興味が十分育まれていない現状を指摘した。また、深い興味を生起させるためには、深い理解を伴う必要があることが示されており(田中, 2013), 興味と理解を相互に深め合うような授業実践への具体的提案が求められている。以上を踏まえ、本研究では4つの研究を通して、興味と理解を相互に深め合う授業実践に向けての示唆を得たい。

研究1：理科に対する興味と学習方略および授業スタイルの国際比較

日本とは異なる文化的・教育的背景をもつオーストラリアにおいて、興味とそれに関わる変数について検討を行い、日本との比較を通して、深い理解と興味を育む授業の特徴について示唆を得ることを目的とした。加えて、学習内容の理解に直接的な影響を与える学習方略について、従来の自己報告形式だけではなく行動指標による測定を試み、興味との関連について検討した。

理科に対する興味や授業スタイルの因子構造については、日本と同じであることが示唆されたが、深い興味について、学年が上がっても下がらないことや、日本に比べて意見交換の機会が多く、目標や達成度も明確に示されていることが示唆された。オーストラリアでの授業観察から、日常生活と密接に関わりのあるプロジェクト型の課題や答えが一つではない発問に対して意見を述べる機会が多いなど、日本とは異なる特徴が見えてきた。また、行動指標を用いた学習方略の測定は、自己報告に比べて理解度をよりよく予測することが示され、有用性が支持された。

研究2：理系大学生の理科に対する興味の特徴および学習方略との関連の検討

中学生に比べてより深い知識と興味をもつと考えられる理系大学生を対象に、調査を行った。理系大学生は、一般的な中学生と比較して、深い興味である思考活性型興味や日常関連型興味が高く、また課題中に適切な方略を用いることができた。また、理科に対して深い知識有している理系大学生特有の興味の種類として、「理科は普遍的な性質をもっているため」という興味がみられた。

研究3：興味を育む授業設計の教育現場における長期的効果の検討

今までに得られた知見を踏まえて、中学校の理科担当教員と1年間の授業改善を試み、その効果を検討した。生徒の興味を変化させるにはいたらなかったものの、研究知見から得られた知見をもとに教員と授業改善についての議論を行い、教員自身が自分の普段の授業の中に議論の内容を反映させるという形で、実際に教員の授業スタイルが変化し、生徒の自己効力感に影響を与えた。また、教師に「興味の深化」「理解の深化」という視点を共有しながら授業改善を行っていくことで、授業スタイルのみならず、授業に対する信念にも変化がもたらされることが示唆された。

研究4：興味と理解が相互に深まる協同学習を導く要因およびプロセスの検討

興味が生起し変化するプロセスそのものを、理解状態や他の変数との関わりの中で詳細に捉えるため、ペア学習中の発話や行動について質的な分析を行った。ペア学習における興味の変化プロセスのいくつかのパターンを見出すことができた。ペア学習の初発に関しては、お互いの考えについて言語化しあうことで、一方のもともとの興味が低かったとしても、興味が引き上げられる可能性が示された。また、自己効力感が高いほど興味が高まるというわけではなく、課題を深く理解することを試みて、わかりそう、いやわからないという状態をいったりきたりすることで、興味が高まることが示唆された。